

『クニスラ』と訓むべきもので、『クスドモ』と訓むのは、古意でないかも知れない。飯田武郷翁は日本書紀通釋に於て、夫木集の。

遠つ人、吉野のくくすくすくにすくいつしくかく、往へぞまつる年の始に

の歌を提供せられて、『こはたしかなる例ありてよめるにや』と言はれたが、やはり是も『クニス』

で差支ないものと思はれる。

『クス』がクシ、コシ、カイなど、同語源であるか否かは、自分の民族論に大きな關係のある問題であるから、名義其のものは一向つまらなくとも、他日の發表の豫備として、こゝに管見を吐露して博識諸賢の叱正を希望する。

ポツダム の 思 出

文學士 長 壽 吉

ポツダムはサンスウシ宮殿(莫愁宮)の在る所、サンスウシ宮はフリードリヒ大王の永眠の床の在る所である。余は大王の平生を、ポツダム見物の思出の中に説かむとするのである。大王の内治征戦は能く人の説く處である。大王時代の海外交通は、他日余之を書かうと思ふ。今茲には、唯機智

や、狡獪を覺ゆる、其事蹟の間に在りて、大王の平生が恰も余には、大王の好んで吹いた笛の音の様に、其遺響を傳へて來るものあるを、記さうと思ふのである。

ポツダムを訪づるゝは、秋の日に如くはなし。一碧秋霽の光、菩提樹の黄葉に照る美しさに、詩

趣の深きものが爲でなく、凋落の近からむとする物悲しさの中に、史興を味ふに便りあるが爲である。獨逸の首府伯林の郊外に在つて、史興の湧く所はポツダムの右に出づるものがない。余が日曜日の散歩地は、多くこのポツダムであつた。大王がその幼時を暮したラインスベルグを訪づれたのも秋であつたが、ポツダムの秋も實に忘るゝ事の出來ぬ感興を、余に遺したのである。伯林の街中を流るゝシブレエ河が、西して湖水ハアフエルとなり、幾多の小湖水を連絡して、エルベ河に流れ入るものは、普露西の建國時代に在りては、重要な物貨運輸の路であつた。其ハアフエル湖の西南端に、ポツダムの町はポツダム森林に圍繞せられて存して居る。伯林より汽車に由るもよいが、ハアフエル湖を航して、途にフワウエン島、(孔雀が島)を見、ポツダムの阜頭に船をすつれば、ツエツペリン航空船は其巨軀を大空に浮べて、二

百年前の古蹟の地を過ぎゆくのである。暗緑の湖上に白鳥の群れ浮ぶ所、ポツダムの町は物淋しく建つて居る。ポツダムの町にて觀る可きものは、寺院と散在する四宮殿とであるが、寺院は大王及大王の父フリイドリヒウイルヘルム第一世(一六八八一—一七四〇)の永眠せる所。四宮殿はポツダム市中にある宮殿、やゝ離れて湖岸にあるマルモア宮(大理石宮)、新宮殿、及サンスウシ宮殿である。新宮殿には現皇帝が、四季の多くを爰に過し給ふ事と、有名なるムツシエルザアル(貝の室)の有る事にて知られて居り、サンスウシ宮殿は全く大王の事蹟を物語る遺物である事にて、世界の觀光者を集めて居る。新宮殿の貝の室を觀る人は、其餘りに没趣味なるに驚くであらう。四壁皆貝殻の各種をぬりこめて、其強烈なる色彩と不規則なる形態とは、全く趣味の混雜コンフュジヨンを來して居る。然し人は爰に於て、現皇帝の性格と、獨逸と

海この題目の上に、幾分の考慮と感想とを置く事が出来ないでも無いであらう。降誕祭の夜は之の室にて、銀タン子樹(聖誕樹)が裝飾せらるゝと謂ふ。余は其夜の燭光が四壁の具に反映する間に、獨逸軍人の華々しき軍装の群を想像して、恒に頭の重きが如き感をいたくを禁じ得なかつたのである。サンスウシ宮殿と寺院とは、全く史輿の中につゝまれて居る。余は先づサンスウシ宮殿に就きて、大王の平生を説く事とする。

フリイドリヒ大王がボツダム森林の一部を、計畫して造らせたサンスウシ樹園の入口を過ぎて、早秋に落つる樹葉の少し散つて居る道を行くと、人は大なる泉池が高き噴水を中央にし、大理石像の幾つかを周圍にして居るのを發見する。泉池に沿うて北方を見れば、數臺に分たれたる階段の上、丘上に常緑樹林につゝまれたるサンスウシ宮は、二百年前をそのまゝに、美景を造つて建つて居る

のである。是の宮園及階段等の設計圖を、大王親ら書いたものは、今猶サンスウシ宮中に陳列せられてあるが、其所謂瀟洒たる趣味の表はす所は即ち佛蘭西風である。當時歐洲が全然佛蘭西趣味の風靡する所であつた事と、大王が其修養に總て佛蘭西書を採り、書簡に佛蘭西文を綴り、言語に佛蘭西語を用ひ、著述に佛蘭西文を使用し、宮中に佛蘭西學者を厚遇した其全然の佛蘭西式とは、實に之の泉池の傍に立ちて、丘上のサンスウシ宮を仰ぐ時、既に之を想起する事が出来るのである。三十年戦争の創痕が、獨逸の内地に於て次第に恢復せられ、民族的自覺と國民的性情の中に、溶合せられつゝある、第十八世紀初頭に於て、伯林大學の論文題には、佛蘭西語の優秀を稱揚せしむるものありしを考ふる時は、大王當時殊に普露西建國當時の獨逸文化が、其性質の奈何なるものなりしかは想像に難く無い。是狀況の間より大獨逸民

族國を現出し、普露西が而かも更に、北邊磽确の地、他民族を混居せる王國を以て、其中心其支配者たる位置に到達せし事の、眞に稀有なる異常なる事は、フリードリヒ大王傳の優秀なる論著者、フライタアク (Gustav Freytag) も之に言及して居る所である。

莫愁宮に登る石礎は、數壇の臺壇(テラッセ)に分たれて居て、各壇の間の石礎は扇形に開いた形態を有して居る。各壇には花を養ひ葡萄を培ふて、紅葉蘿も礎にまごはつて居る。サンスウシ樹園の東部にも葡萄園があるから、ボツダム「葡土壇」の譯字は、莫愁宮とにも、詩句に用ひ得る所であらう。最上の壇に至れば、爰はサンスウシ宮殿の前庭、伊太利式花園で、東西に二個の簡單なる噴水池が在る。この花園の東端にはフロラの神の銅像と樹亭とが在る。大王の愛犬は爰に埋められてあると云ふ。大王が永眠に近き日頃、この莫愁宮

に端居して、ブランデンブルクの平野に沈む日を、樹園の彼方に見やりつゝ、生涯の回顧に耽る時、無心の小狗が、庭上を走りつゝある光景の繪や。莫愁宮中の書室にて、大王にたはむるゝこの小狗の繪などを、想起せしむるのである。大王も嘗てこのフロラ神の下に、永眠せむことを望むだと云ふ。かくて大王の有名なる語、*Quand je serai la, je serai sans souci.* が残つて居る。今余が前には偉大なるカリアタイドを列ねたる、一階建築のサンスウシ宮殿がある。ロココにして而して嬌奢ならず。或人は之の宮殿を以て、其餘りに粗略質素なるに驚くと謂へども、若し大王の生涯を讀み、其尺牘を讀み、其性格を考ふるもの、之を觀れば實に莫愁宮は、大王性格の表現である、瀟洒にして且つ悲哀である。

大王の生涯は武勳と權謀とに蓋はれて居る。之の方面を見れば大王の如きは、最も惡む可き人格

であるかも知れぬ。例へば彼は「難マキアベリ」を著しつつ、嘗て「若し正直を以て得可きものあらば、吾等は正直を以て之を獲得す可し。欺瞞を以てす可きものあらば、吾等は欺瞞す可し」と言ひ又ポーランド分割に反對したる、マリアテレザを笑ひて、「彼女は常に泣く、而も常に獲得す」と言ひたる如き、皆大王の性格を論ずるに價あるものである。然し彼が一生の片面は、實に悲哀歴世の思想、寂寞瀟洒の生命、デイレタント沈思の徑路である。性質の相違に由る大王と其父「兵隊王」との不和は、大王の性質の上に必ず多くの痕跡を残したに違ひない。度々の不和の事件、大王の出奔計畫は、多く物の本に書いてある。大王が父王の嚴峻に堪はずして、國外出奔を計畫して捕はれたる時、其従者カテエはラインスベルグの城にて斬られたが、強て之を見せしめられたる大王の悲嘆、又其當時大王が父王に送りたる書柬を讀み考

ふるものは、大王の心事に泣かむとするのである。又後年戰場に、其幼少時以來の侍臣を失ひたる大王は、其書柬に「余の如き感傷的に作られたる心には、この深刻なる悲哀を制する難はず、伯林に歸らば余は吾が自らの國に、他人の如く吾家に寂しく、取殘されたるを感ずるならむ」と記して居る。然し「彼は平靜なる心を以て、彼の決意を作つたのである。不信を以て人を見、彼の道具として人を使用し、人を欺瞞し、冷かなる惻智を以て人を機嫌どる」(フライタアク)様になつたのである。人若し大王が書柬に就て、殊に王妹バイロイト公妣に宛てたるものを讀まば、彼が如何にやさしき心情の持主であつたかを知るであらう。父王に強いられたるブラウンシュウイク家との婚約に就きて、「余は木にて作られたりや、好き夫を彫刻し出し得可き、木にて作られたりや」と、絶望の言を發せる彼を見れば、彼が私生涯のいかに寂寞

たりしかを知るであらう。莫愁宮中の書室に人を遠ざけたる彼れ。「余は文學上の聲譽を得ん爲に力の及ぶ凡てを爲せり、是に於てはリシエリユよりも成功せり。神よ感謝す。余は著述家として認められたりと」言へる彼れ。更に又其最も好む笛を吹き樂むで、自ら作曲に耽つた彼れを考ふる時は、人は大王の生涯に對して、眞の温かき興味を有つに至り、之を普通の史書に在る武勳と謀略との一面と相照して、大王の生涯は實に奮闘努力に終始するの意義を、識るに至るであらう。トライ

チク曰く、「二つの性質は彼の内に相争ふた。哲理的學者―音樂と佛蘭西韻文の旋律に耽美し、詩的名聲を以て地上の最大の幸福としたる哲學者。一方に又剛健なる北方獨逸人―軍人の勇武と不斷の努力、又鋏石の峻嚴を以て、荒々しき飾無き人民の典型たりし北方獨逸人」と。蓋し實に古代獨逸人と近世獨逸人とを、一身に兼ねたる如き大王

の生涯の研究の興趣は、多く世人が謂ふ所のピスマルク研究の如き乾燥無味のもの、比す可き所でないのである。

莫愁宮中には、ロココ裝飾の美しきヴォルテエア室がある。大王がヴォルテエアの外交策を嘲笑し、ヴォルテエアが大王の佛蘭西詩を嘲笑したる物語は、二人の親交の有様を遺憾なく表はして居る。「ヴォルテエアは柔順な性質でない。故に余は彼を宮中より退け其代りにモオベルチユイを招いた」と言ひ。又「ダレムベエルは極く善き人柄。余が傍に在るや、決して自ら口を開かず、余に懇懃である」と。大王が言ひたるを見れば、この三者と大王との關係、殊に大王が彼等の體度に矢張り服従を要求した事などが、想像せらるゝのである。ヴォルテエア室を去つて、吾等觀光客は莫愁宮中央の圓形の室に案内せらるゝのである。アドルフ、メンツェル(二八一―五)の傑作で、伯林繪

畫館に在る、圓き食卓に大王が學者戰友を集め會食する繪は、この室に於ての光景で在る。大王は彼の所謂「晩には余は余を良き仲間」に於て清新にす」と云ふ趣味を有して居たが、晩年に至ては、彼は人々を「忌避す可き種屬」と唱して居る。大王

は其晩年に向ふに従て、社交的から次第に閉居的になつた様がある。余は爰に少しく大王の平生、殊にこのサンスウシ宮中に於ける生活を記してみやう。「余は四時に起きる」と彼れが言ふが如く、大王は朝早く起床して、朝食には強い珈琲と、フエンフェルの葉を入れて匂はした水を飲む。それから少時笛を吹いて後、政務を見たり、兵隊を檢閲したり、或は臣下を引見して、晝に至り、晝食は非常に長い時間を費して、多數の陪席者どもに食する習慣である。食後再び笛を採つて、少時彼は之に耽る。其後彼は再強い珈琲を飲む。そして書室に閉居して讀書に耽ること二時間。夕七時

に小コンサートを開く、彼自身笛を以て之に加はる事がある。晩食には學者を招きて之と談笑する。かくて大王は十時に寢に就くならはしであつた。謂ふ。強い珈琲とフエンフェルの匂ふ水、笛と讀書、大王の日常は、眞に清新のものである。

莫愁宮中の他の室には、大王の居室と、コンサアート室と、書室等がある。居室には大王永眠の時の安樂椅子や、寢臺がそのままに置てあり。コンサアート室には、大王親ら使用したと云時計が、大王永眠の時、午前二時二十分を示して止まつて居る。書室に入るものは書籍が凡て佛蘭西書あるを見るであらう。大王が幼時よりの趣味殊に文學趣味は、佛蘭西文學の上にあつた事は、皆人の好く知る所である。然し或は大王を以て、獨逸文學の迫害者なりと論ずるものもある。トライチケは次の様に言うて居る。「フライドリヒの獨逸文化に對する冷淡は、恐らく近代獨逸の長き雌伏の歴史

に於ける、最も慘たる最不自然なる現象であらう。獨逸民に自覺を興へたる是の第一人は、高尚且特色ある其人民の創作に對して、全く他人であつた」彼又曰く、「強烈に彼は近世佛蘭西理想に傾いて居つたけれども、彼が佛蘭西語を以て獨逸の思想を言明する場合、或は彼が獨逸の王侯として將軍として、政治軍事又は歴史の著作をなす場合に於てのみ、彼は眞の大なる論客である。フリードリヒは、外國の學派の中に於て、自己の強力、自己の比類なき經驗の中よりして、吾等の第十八世紀に於ける第一の政論家となつた。創設的の批評に由て、國家と云觀念に接近したる唯一の獨逸人、崇高なる形式に於て市民の義務を論じたる唯一の獨逸人である。何人も未嘗て國土の概念なき者、如く、吾等の Vaterland の愛慕を、爾く熱烈に爾く深刻に、論じたものはないのである」彼れ

又曰く、「老王はもしや彼の佛蘭西バルナツスの高嶺より、獨逸のムウゼの平野に降ることを欲しない。而していかには獨逸民が、詩的藝術に於て終には覺醒す可きかを批判して居る。彼の崩御前六年に於ける獨逸文學論には、彼は獨逸語の精練せられざる粗野に對して、氣むつかしき巴里人の批評をくり返して居る。而して彼が悔蔑を以て辛うじて讀み得たる、Grenz von Heilichingen の怖る可き平凡を非難して居る。然しこの憎む可き議論をのものは、却て彼が感情的なる國家的自負を反對に聲高く證言するものであつて、彼は獨逸民の將來に於て、當時既に其の曙光の輝きを見せたる、知識上の名譽の來る可き事を豫言して居るのである。昔のモオセスが如く、彼は豫期せられた地域が、遠方に存するを認め、(恐らく後に來るものは、總て彼等の前進者に優越す可し)と、希望に満ちたる言を放つて居るのである。しかく

密接に、しかく疎遠に、しかく縁遠く、しかく親密に、獨逸の最偉なる王は、其人民との關係に存在したのである」

莫愁宮の書室には、前記したるサンヌウシ宮の全部のプランを、大王親ら計畫したる、其の圖を陳列したるのみならず、更に大王自作の笛の曲譜をも陳列して在る。朝に夕に大王がその愛玩の笛をとりて、莫愁宮外の春秋、嘲哢の音を絶たなかつたその風流は、今も猶訪客の耳に、遺響を傳へ來るの感がある。大王曰く、「余は劇的の催しを好むこと甚し、殊に音樂は最愛する所也。然しオペラは怖ろしく高價である。好き聲樂好きヴィオリンを聞く樂しみは、むしろ快活にして清新である」と。彼は日常コンサートを莫愁宮中に催し、或は親ら笛を以て之に加はることは、既に記した如くである。而して大王は恒に作曲す。笛の爲のコンサート、笛のソロ種々あり。フリードリヒ大

王の多能多藝は、實に驚く可きものがある。古來帝王にして實に大王の如く、戰士たり、論客たり、詩人たり、哲人たり、藝術家たるもの、其比を見ざる所である。大王又曰く、「余は余が間暇を藝術の下に費す。余はその凡てに興味を有す、何ものをも斥けず」と、即位の後間もなく、大王は宮廷の樂師長グラウンを伊太利に派し、樂人を集めて伯林に歌劇場を開かしめむとしたのである。當時獨逸の大部分は伊太利派歌劇を尙美し、その旋律主義の傾向に風靡せられたる事は、大王の弟ハインリヒがウイン市に於て、モツアルト流の歌劇を聞て、其交響を解せざりしに徴す可く、書室に陳列せられたる大王の作曲笛のソロ曲譜、又ワイマア市のリスト陳列館にあるものを讀むに、小節の長短の如き樂典上の缺點を發見すれども、要するに旋律は全く伊太利的或は南歐的の華麗を具へて、大王が佛蘭西文學に、其文學上の趣味を専ら

にしたのと相對して居るのである。

サンスウシ宮の内外裝飾は、總てロココ式の華麗にして、而して瀟洒たるものである。殊にヴォルテエア室及書室は、ロココ式の草樣様を一面に裝飾し、ヴォルテエア室はやゝ華美に傾くが、書室は最も高雅、窓外の綠樹は、室中に多く用ひられたる鏡に反映して、一層の美しさを感じしむるものがある。歩廊は一の繪畫彫刻館を形造り、繪畫には佛蘭西派の風景畫、及フahaman風俗畫が多い。之に於ても大王の趣味の、一面を窺ふ事が出来るのである。サンスウシ宮殿の近傍にある建築物殊に繪畫館の如き、ポツダム見物の人の必ず見る所であるが、今余は之を省略して記さぬ。サンスウシ宮の西方には、今猶大王に就ての物語に有名なる、風車屋が樹林の中より屹立して居る。

(Il y a des Juges a Berlin) サンスウシ宮の丘をや、降つて、北方森林中のカフェサンスウシに休

息し、サンスウシ蒸肉と稱するものを命じて、美味の葡萄酒を酌めば、落葉の音靜にして殘照林の中に入る、ポツダムを訪ひサンスウシ宮を觀る、秋の日に如くはなし、

ポツダム市を訪ひ大王の生涯を思ふもの、必ずガルニゾン寺院に詣づるものである。寺院は大王の遺骸を葬りたる所である。寺院の北に小公園がある。花をしき樹を植ゑ、中央に大王の銅像を置く。庭椅子に腰うちかけて大王の像を仰げば、生前の風姿、眼前にあるの思がある。「フリードリヒはやうやく中背位、日やけの顔には大きな青い眼が、生氣と意志とにみちた光を放つて居る。栗色の髪を卷いて下げ、後頭には黒いリボンで結んだ、辨髮(ツオッフ)を飾つて居る。」(マックスハイン) 是銅像に表はるゝ彼が快活なりし舉動は、其悲哀なる性質の一面と相對して考ふれば、幾多の想像を生む、かくて余が大王の生涯を追想しつ

ある時 ガルニゾン寺塔の寺鐘は時を告げつゝ
「かみをあがめよ」の聖歌の一ふしを奏するのであ
る。何等の感慨ぞや。余は追想にふけりつゝ寺院
に入れば、寺院は太古の如く静かである。大王の父
フリイドリヒウイルヘルム第一世の建つる所で、
廣くはないが美しく飾られ、殊に君主の席は美し
く裝飾せられてある。一八〇五年露西亞帝アレキ
サンダア第一世は、普露西主フリイドリヒウイル
ヘルム第三世と爰に盟約したのである。色大理石
の柱に圍まれたる、白大理石の階段の下、鏡扉を
開けば、うす暗き室中に、左に方形の棺あるはフ
リイドリヒウイルヘルム第一世、右に稜形の棺あ
るは、實にフリイドリヒ大王の永眠する所である。
余が前數尺、古普露西の英雄王は、其親らの笛の
美しき音の中に、天國の夢を夢みつゝ、彼が一世
の戦塵、彼が一世の誓言、彼が一世の韻華、皆葬
られて爰にあるを思へば、感慨無量余は佇立して

去る難はざるものがある。大王の普露西庶民に於
ける敬慕同情は、今猶大王當時と等しくして、來
り詣づるもの踵を絶たず。世界の人亦東西より來
り詣で、皆大王を追慕す。「大王の宮庭も樹園も、
今は實に寂寞たり。彼が普露西人の想及は皆、恒
に常に王が周圍に浮泛して居る。若し暖かき月光
の夜、人の宮殿に近く來るものあらば、開き放ち
たる扉、一人の夜警もなき所、大君主はその寢室
に、粗末なる寢臺にて、眠れるを見ることを得る
であらう。樹の花の香のたゞよひ、林鳥の夜の歌、
静寂たる月の光のみこそ、是の淋しき人の夜警、
其宮廷の總てである。西プロイセンの領有以後の
十四度、サンスウシの香柑の花は、開き又散つた。
かくて大自然は、又大君王の上にも支配したので
ある。彼は淋しくたゞ孤り、唯彼の從者に護られ
て終に永眠した」と余はこのフライタアクの美文
を想像して、祈禱机に據りて、大王の爲に祈る時、

寺護りの老婆は巡禮者を導いて、大王の棺室の前に立ち、聲高に説明の語句をくり返して居る。

る。彼曰く、大王は困難の時に、最も偉大なる人物なり。大王よ。大王若し今世に在らば、余は恐らく今、爰に立つを得ざる可し」

「大ナポレオンも嘗て爰に立ちて、禮拜した事がある

歐洲の天候と戰場 (上)

文學士 中 目 覺

一 はしがき

今回の歐洲戰に於て地理學の方面から見て著しい事實は、戰爭の舞臺が極めて廣くなり、従つて

ラツツエル博士が政治地理學第五編第十三章に精しく述べて居る。

大面積操縦力のある者が常に機先を制して勝利を得るといふことゝ、天候が作戰に少からぬ關係を有し、従つて氣象學的智識に富み、其利用に巧な者が亦勝を占めるといふことである。この二つの點に於て獨逸人が他の國民に優つて居る様に思はれる。面積操縦 (Raumverwältigung) に關しては

獨逸人が天氣豫報に重きを置いた例を舉げて見よう。白耳義のユツクル (Döge) に氣象觀測所があつたが、之は一九一四年八月二十日に獨軍野戰測候所と改まり、尙ほ同種のをリエーヅ (Liese) ナミュール (Namer) 及び海岸の諸地に設け、専門家をして下層及び高層の氣象觀測をさせ、其結果をハンブルグの海洋島へ打電する。ユツク